

かぜのきざし

2012 MAY

風の萌

特定非営利活動法人(NPO)
在宅ケアを支える診療所・
市民全国ネットワーク機関紙

第018号

2012年5月31日

安心して子育てができ 老いても障がいがあっても 自分らしく暮らすことができる コミュニティーの創造

理事会報告

高知大会 理事会企画決定

4月14日・15日の両日にわたり、名古屋において理事会が開催され、高知大会での理事会企画が決定しました。

議題としては来る9月16・17日に四国・高知で開催される「第18回全国の集いin高知2012」における、理事会企画についての内容の決定が主な議題でした。理事会企画の内容を決め

るにあたり、まず、コア会議で方向性を決め、理事会においてその内容を決定する方法で練り上げられたもので、その意味では黒岩会長後の新体制の元での執行部、理事の意気込みが現れた決定の経緯であった。その結果、以下の2つのテーマ(サブタイトルを含め)が理事会企画の内容として決定しました。



NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク理事会企画……①

大会2日目 09:00～ 小ホールにて

「医療」から「生活」へ

私たちは、地域に何ができるのか

コーディネーター 副会長：長縄伸幸

コメンテーター 黒岩卓夫

NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク理事会企画……②

大会2日目 13:10～ 小ホールにて

私たちの「終活」

私たちは、地域に何ができるのか

コーディネーター 副会長：大澤 誠

出席理事…(敬称略)
青原実、大澤誠、長縄伸幸、藤村淳子、
畑恒土、石田一美、福田善晴、中嶋久矩、
金井秀樹、村山善紀、井村隆、吉永隆行、
大川延也、中嶋啓子、
青木佳之(14日のみ)、黒岩卓夫(15日

のみ)、多湖光宗(16日午前のみ)
欠席理事…(敬称略)
桑原由次、金田弘子、森本益雄、井手
下久登、宮坂圭一、渡澤温之、太田秀樹、
新田國夫、上村伯人、岡崎和佳子、西
嶋公子



「全国の集いin高知2012」の理事会企画において2つのテーマ(①「医療」から「生活」へ、と、②私たちの「終活」のコーディネート)を当ネットワークの長縄伸幸氏と大澤 誠氏が担当します。

長縄氏は第9回 岐阜大会 大澤氏は第15回 群馬大会の大会長を務めるなど当ネットワークにおいて重要な役割を担ってこられました。今年度、創立以来の会長であった黒岩卓夫氏に代わり苛原 実氏を新会長とし、新たなスタートを切ることに

なり、長縄、大澤両氏は副会長として会長と共に会の舵取りを行うことになりました。

そのような両氏より、今回、原稿をいただきました。

在宅・介護問題や、今回の理事会企画に対する両氏「思い」を感じていただければと存じます。

「医療」から「生活」へ

～ 私たちは地域に何ができるのか～

在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク 副会長

(第9回全国の集いin岐阜 2003 大会長)

医療法人フェニックス 鶴沼中央クリニック 長縄伸幸



副会長 長縄伸幸氏

の創設、その後の医療保険改革と順調に制度の軌道修正が行われてきましたが、グローバル化やリーマンショックによる世界経済の混乱と日本経済の沈滞により、財源も含めそのシナリオを大きく変更せざる負えなくなっています。

社会保障・税一体改革シナリオの本音

「2025年地域包括ケアシステム整備完了」の第一歩が始まる
～2012年診療報酬・介護報酬同時改訂のメッセージをいかに読むか～

少子高齢社会への危機感から始まったいわゆるゴールドプラン十ヶ年計画にもとづく介護施設の整備、2000年に介護保険制度

少子多死社会を迎え、①我々には金がないので何とか医療費や介護費の伸びを抑えたい! ②サービスの質は維持したい、がこれから2025年に向けての我々の大きな命題です。

そこで、総論として・病院間の役割を決め、無駄なことや同じようなことをさせない(機能分化)

・病院に行かなくても済む患者は診療所対応完結させる(病院と診療所の役割分担)

・入院の必要がなくなった時はできる限り在宅で(在宅医療の推進)

・重度になった時入院・入所させるより疾病・介護予防と早期対応(予防・リハビリ)

・人生終末のあり方は元気な時に周りに語り伝え、簡素な終末も選択肢にする(本人・家族・医療者がともに納得する終末を満足死)

などが挙げられますが、国はこれらの解決方法の各論は地域事情に応じて地域が知恵(地域包括ケアシステム)を出して欲しいと、日本人の根性に期待しています。

地域包括ケア研究会報告書がそのシナリオのもとである

2012年の4月に診療報酬・介護報酬同時改訂が行われましたが、私は次の同時改訂までの6年間にシナリオに沿ってすべき方向性がここに込められていると思っ

ています(国の基本原則として、平成24年の診療報酬・介護報酬同時改訂にあたって国として地域包括ケアを進めるべく以下の基本政策を明示する。さらに、2025年までにそのサービスを整備完備することが必要である。と報告書は提言している。

その重要なキーワードは、○○○加算、特に新設された○○○連携加算に注目し、出来る限り算定できるよう実行したいと思っています。努力する者のみ報われるというサバイバルゲームが始まったと思っています。そして、向こう20年先の大勢はこの6年間で決まると言っても過言ではないと私は思っています。

我々ネットワーク活動の方向性もここに集約されると考えます。従って、高知におけるネットワークの全国大会では、理事会企画として大会二日目に会員の皆様とホットな論議したいと思っています。各地域での先進的な試みのご紹介やご意見をいただければ幸いです。

摂食回復支援食

あいと



摂食回復支援食とは… 通常の食事を取ることが難しい方の食べる機能と栄養摂取を支援するための食事です。

お問い合わせ・資料請求の連絡先



イーエヌ大塚製薬株式会社

東京都千代田区富士見2-7-2 ステージビルディング13階

お問い合わせ窓口

TEL.03-3515-0170

月曜～金曜 9時～17時(祝祭日、年末年始、お盆を除く)

NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク理事会企画……②

私たちの「終活」

人生の仕上げをどう生きるか、どう支えるか

在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク
(第15回全国の集いin群馬 2009 大会長)
医療法人あづま会 大井戸診療所 大澤 誠 副会長



副会長 大澤 誠 氏

9月の高知大会の理事企画の一つは、シンポジウム『私たちの「終活」…人生の仕上げをどう生きるか、どう支えるか』ということに決まった。

くとともに、医療と介護の立場から、その意味を膨らませ、本ネットワークなりの解釈をしていく、さらには住み慣れた地域で看取ることをわが国の文化にしているという意図をもっている。

もともと、このテーマが決まるまでには紆余曲折があった。ひとつは黒岩理事の、「終活」という言葉の定義がいまいであり、またその言葉が軽い印象を与えるのではないかという意見である。二つ目は、中嶋(久)理事の、この造語が(社)終活カウンセラー協会の言葉であり、それを当ネットワークで用いて流布するのはふさわしくないという意見である。しかし、後者に対しては、既にNHKが何度か取り上げ、徐々にこの言葉が世間に広がる兆しをみせていることをみても、一民間団体の枠を超えての事象となっていることがそれに対する反論である。また、ひとつ目の意見に関しては、本シンポジウムにおいて、(社)終活カウンセラー協会の中下大樹氏にその定義を語って頂くとともに、太田理

事の「終活」という言葉は、ギャッチとしても賛成です。(中略)そもそも生活の場での看取りは、家族をはじめとした市民側の課題で、医療者は看取りのお手伝いをするにすぎません。終末期医療は、医療・介護専門職の手から、市民の手に移りつつあるということを伝えたいと考えます。つまり、市民主導ということであり、市民の関心を引きつけるには魅力的なテーマが必要です。」というメール上の意見でこれも解決を得たように思う。

理事のメール上でこうした議論が交わされている最中、私は次の様な看取りを経験し、メールに報告した。

大澤です。3・33、肺癌(小細胞癌)の女性をご自宅で見取って帰って来ました。「家に帰りたい」というご本人の気持ちを含んで、3番目の夫という微妙な立場でありながら、ご本人の気持ちを尊重され、転移性脳腫瘍に伴う脳圧亢進症状、脳梗塞後遺症に伴う右(患側)上下肢の痙攣、そして最後には肺炎合併でという再入院の危機を乗り越えてのご自宅での看取りでした。(最後の3日間ご本人の意識はなく、ご親戚の方々からはなぜ入院させないんだというご主人に対しての批判の声も上がっていたようです。)

私たちが考える「終活」には、中

嶋(久)理事が『人生の終わりの迎え方すべてに関わることにすることのようです』というように、この方の「家に帰りたい」という願いもその中に含まれています。ご本人のそうした「終活」がなければ、この方の在宅での最後は実現しなかったものと思います。

中嶋(久)理事が『それは私達在宅ケアに関わる専門職にとどまらず 弁護士 宗教者 行政 哲学者 相続 等 広い範囲に関すること』と言うように、まさにそれだからこそ、NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワークのテーマにふさわしいのだと思うのが如何でしょう。

本ネットワークの会員は、がんであれ非がんの人であれ、緩和的な医療やケアが大切な時期を迎えることを良く知っている。また、黒岩理事が「私はこれ(「終活」と似たことは以前から考えていました。私は介護保険制度内でケアプランに対して、ライフプランという言葉を使って、ライフプランなしのケアプランの限界を指摘して来ました。しかし、私のいうライフプランは民間保険会社のいう様な狭いものではありません。在宅から終末期までをどうするのか、在宅での看取りにはどのような条件が必要か、家族の介護力と意識、

そして愛情はどうなのか、経済力はどうか、土地や資産をケアに使うにはどうしたらよいのか、法治国としてのしきたりをどう使えるのか、さらにヒューマニズム的なところから家族や当事者を取りまく人間関係を、どこまで期待できるのか……」と言うように、私たちは、人生の後半の生き方を支えるにあたり、介護保険制度には限界があることも良く知っている。

桑原理事が「人の死に関わる職種が互いの領域を超えて連携しなければ、人生の終焉活動はうまくいかないことは明白です。『終活』とその支援は単なる死に対する心の準備だけでなく、私たち一人ひとりの生き方とも言えます。本ネットワークとしてはまず、介護や福祉、医療や保険及び関連分野など、人のいのちに関わりとして関わる方に、地域に根ざした連携の模索を提唱、啓発していくことから始めるべきと考えます。」とまとめたが、「このテーマはとても実践的で日常診療に直結する問題(苛原会長)」と言える。

当日は、(社)終活カウンセラー協会の中下大樹氏、太田秀樹・石田一美両理事、大澤の他に、介護施設関係者(未決定)の登壇を予定している。多くの皆様のご参加を期待している。

Mail Magazine

今回は「風の萌」より会員紹介のコラムの2～4月号を掲載いたしました。

この記事は毎月メールマガジンの記事として皆様に配布されている記事の転載版です。(スタイル等は一部変更しています。) メールマガジンでの配信はもちろん「多くの人に」、「迅速な」、配信が目的で、メールの特徴を発揮出来るものですが、現実としてメール配信されている数は「多くの人に」というにはまだまだ充実を計る必要があります。



事務局ニュース2012.2

医師・法人会員活動紹介

「医療法人宮城会 宮城医院」

当院は1948年に開設され、本年で64年になります。当初より外来診療、在宅診療を行い地域の人々と共に歩んできました。1993年の医院増改築を機に理念を提唱しました。

1. 安心と信頼の医療・介護の提供
2. 豊かな人生を支援する在宅支援チーム
3. 保健・医療・介護の

協働サービスの充実であります。在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク(全国ネット)への参加は1994年の岡山での準備会が最初であり、全国で在宅医療に精力的に取り組んでいる多くの方に触発され当院の進むべき診療所像を描きつつ今日まで築き上げて来ました。全国ネットへは欠かさず参加し、出来る限り発表も行ってきました。当院の組織は外来診療では内科一般、予約外来で「物忘れ外来」「禁煙外来」と外科一般・整形外科を行っています。医師は常勤2名、非常勤2名、非常勤で臨床検査技師、管理栄養士が各1名、外来リハビリでPT、STが各1名います。訪問診療は在宅療養支援診療所として3名の医師で行い、1ヶ月75～80名

の患者を訪問(癌患者10名)しています。最近では地区医師会で5名の医師が、特に癌患者の在宅を主治医、副主治医の関係の2人体制で診て行くシステムを創りつつあります。年間在宅看取り数は約30名です。訪問看護ステーション、訪問リハビリテーション、(PT、ST)、通所リハビリテーション、ヘルパーセンター、居宅介護センター2ヶ所(1ヶ所は重度の方を担当)、地域包括支援センターを併設しています。2005年にはISO9001(2000)

の認証を取得し外部評価を受ける事により、より質の高い医療、介護を目指しています。関連施設として有限会社でデイスタービスを2ヶ所開設しています。本年4月のグループホーム開設に向け現在、建設が進んでいるところです。今後は、医療、介護のチームケアによりその方の生活を支え、出来る限り住みなれた地域で過ごして頂けるよう地域コミュニティ創りに進みたいと考えています。

医療法人 宮城会 宮城医院

〒639-0034
奈良県天理市丹波町302番地
TEL:0743-63-1114
FAX:0743-63-3866
E-mail:mm@myagikai.or.jp

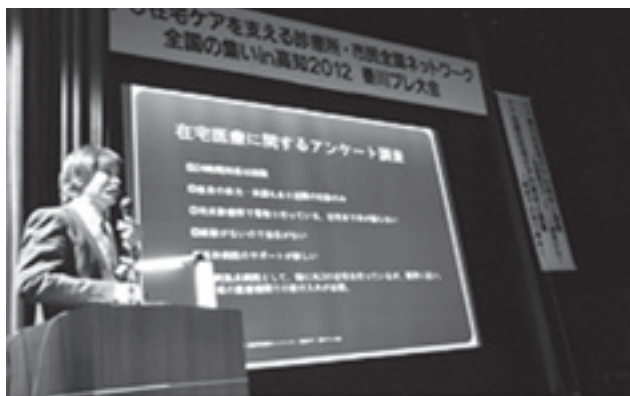
事務局ニュース2012.3

全国の集いin高知2012 香川プレ大会を開催して

2月26日香川県総合福祉センターにおきまして香川プレ大会を開催いたしましたのでご報告申し上げます。

昨年1月に全国大会会長の福田善晴先生よりプレ大会のご案内を頂きました。

私どものような小さなクリニックがそのような大会を開催するのは身分不相応かとも思いましたが、福田先生の御熱心なお誘いと、これまでのプレ大会の規模も様々であり得る範囲で良



いとお聞きし、開催を決意いたしました。

プレ大会の企画を考えていた所、5月に高松市医師会と香川県医師国保課が中心に高松地域在宅医療推進委員会が発足し、私もその委員に加えて頂くことになりました。

委員会で私は今後地域に在宅医療を広め将来像を描くには、まず現状把握が必要と訴えアンケート調査を提案いたしました所、調査は承認され実施することに

なりました。

プレ大会の第一部でこのアンケート調査をもとに、高松市の在宅ケアの現状を多職種の観点からディスカッションし、第二部では四国の在宅ケアを先進的に精力的にリードされている先生をお招きし御講演頂き、香川県の今後の在宅ケアの参考にさせていただくという企画をいたしました。

シンポジストとして永井康徳先生(愛媛) 吉田大介先生(徳島)和田忠志先生(高

知)にご快諾いただき、プレ大会のグレードはさらに上がり、事前参加申し込みは200名を超え、当日は県内外から240名にお越し頂きました。

参加者の約三分の一が一般市民であり、地域の在宅への関心の深さを再認識しました。当日行ったアンケートにも約半数の方にお答え

頂き、シンポジウム1、2ともにほとんどの方が参考になったとの評価をして頂きました。

振り返りましてこの大会が盛会に終わったのは、当日参加頂いた皆様、実行委員会のメンバー、20名以上のボランティアの皆様のお陰と深く感謝申し上げますが、本当のプレ大会の成功

は今後さらに在宅ケアの

ニーズが増える将来に地域に在宅ケアが根付き、本会のメインテーマである「老いても病んでも我が家で暮らせる地域づくり」が達成されていることであると思います。

今後も地域の方々と在宅ケア推進に努める勇気を頂いた、貴重な一日でした。

事務局ニュース2012.3

医師・法学会員活動紹介

「医療法人南労会 みどりクリニック」

ご無沙汰いたしております。皆様益々ご活躍のことお喜び申し上げます。ご紹介させていただきます。

1996年開設しました。1984年設立した法人本体の紀和病院をバックにして、在宅医療を担うこととしました。

現在は、24時間支援診療所の機能、物忘れ外来、糖尿病など生活習慣病の診療にあたっています。

直近の目標は3つです。

1つ目の在宅診療については、緩和医療です。紀和病院に緩和ケア病棟を、大阪南方面の緩和医療を担うべく、2003年に開所しました。病棟と在宅を行き来する緩和ケアを進めたいと思います。身体障害への医療ケアについては、リハビリテーション療法士57人おり、回復期リハビリ病棟、外来リハビリテーション



ン、デイケアリハビリクラブ、訪問リハビリテーション、訪問看護ステーション、

ショートステイがあり、チームで解決しています。高次脳機能障害支援相談チームが活動を始めました。

2つ目は、認知症です。物忘れ外来と、認知症専用の小規模多機能型居宅施設、デイサービス、家族会で取り組んでいます。

3つ目は、糖尿病などをセルフコントロールすることとを支援しています。看護師、栄養士だけでなく、クラーク、事務員のチームにより、機能させられている

事務局ニュース2012.4

医師・法人会員活動紹介

「大川歯科医院」

「口から食べるから元気になる」

私の診療室は一人の歯科医師、三人の歯科衛生士、一人の受付のこじんまりとした典型的な歯科医院です。木、日を除く平日は外来診療を行い、木、日の休日に訪問診療をしています。今から約17

と想っています。患者会の会員数は減っていますが、1996年より続いています。

3年前に私が体調を崩し、貴会へ参加できずにおりましたが、機関誌により励まされ、なんとか診療を続けていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いを申し上げます。

医療法人 南労会 みどりクリニック
〒648-0085
和歌山県橋本市岸上22-1
TEL:0736-34-2811
FAX:0736-34-2151
E-mail:matsuura.tunio@nanroukai.or.jp

18年前、40歳を過ぎて、歯科医師としてやっと患者さんのお役にたてるようになったかなと感じておりました。

ある患者さんからお母様が脳梗塞で寝たきりとなり、先生のところに通えない、入れ歯ががたがたで食べられない、どんどん痩せていくし、



口数も少なくなり、ほーっとしてることが多くなったとのことでした。患者さんが来られないのなら、こちらから訪問するのはかかりつけ歯科医としてはあたりまえ。これが訪問診療の始まりでした。在宅においても、診療室と同じように義歯治療を施しましたが、どうしてもうまくいかないのです。歯科大学で教えていただいた歯科治療は、基本的に歩いて来院できる「健康的な方」への治療であり、麻痺や障害を持った方にはまったく通用せず、さらにリハビリという考え方もありませんでした。そこで訪問歯科治療の

パイオニア、前理事の加藤武彦先生の門をたたき、一から手とり足とりご指導いただきました。義歯は装具、障害にあわせなければ使えない、そして、さらにその装具を使える口にはリハビリしていかねれば食べられない。それは、これまでの歯科界には全くない、目からうろこの治療、考え方でした。

その後、口から食べられることによって元気になっていく在宅療養者をたくさん見てきました。医師を中心としたケアチームが「口から食べる」をキーワードに協働することによって、在宅療養者のQOLは向上し、結果ADLの向上にもつながってくる。歯科医として、ひとりでも多くの療養者が口から食べて元気になるよう、そして、何よりも周りで支える家族、介護者みんなが笑顔になれるようにお手伝いできればいつも考えています。

大川歯科医院
〒207-0015
東京都中央区1-11-13
TEL:042-565-2588
FAX:042-565-2588
E-mail:hohned@star.ocn.ne.jp

エレクトロニクスで病魔に挑戦

NIHON KOHDEN

わたしたちが、夢の実現をお手伝いいたします。

すべては、医院開業の成功のために。

61A-0294

60 おかげさまで創立60周年
ヘルスケアの未来を拓く

〒161-8560 東京都新宿区西落合1-31-4
創立/1951年8月
事業内容/医用電子機器の開発・製造・販売、医院開業支援

日本光電 医院開業支援 **検索**

<http://www.nihonkohden.co.jp/iryo/practice/>
E-mail :Kaigy@mb8.nkc.co.jp

事務局の方のスタッフとして活躍をお願いしている桑原由次氏にも原稿をいただきました。事務局局長 と共に事務局次長(前 東ブロック長より名称変更)としてネットワーク及び事務局の運営に携わっております。新会長の元、これからのネットワークの発展にふさわしい事務局を目指すべく、その活動にご期待下さい。



事務局次長 桑原由次氏

1. 在宅ケアを支える診療所・市民ネットワークに対する考え方

在宅ケアを支える診療所・市民ネットワーク(以下「ネットワーク」と記します)に関わらせていただいて、およそ10年がたちます。以前は、介護保険の事業者としての立場でした。今は、NPOを支援する中間支援NPOとしての関わりが主たるものです。

福祉事業者の立場のころの主要な関心ごととは①福祉サービスの質の向上について②福祉と医療の連携の推進、でした。これらは、おそらく永遠の課題ですが、介護保険開始

当初に比べれば相当の進化を遂げていると思います。毎年各地で開催される「ネットワーク」の全国大会での実践交流会は、「ネットワーク」事業の主要なファクターです。ここでの現場からの発表を楽しみにさせて頂いています。

年毎に「進化」を感じることが出来るまねな事柄です。これをお読みになる皆さんとも共有化したいものです。これから現場に依拠した「ネットワーク」として、歩んでいくことを望んでいます。

中間支援NPOの立場からの関心ごととは、NPOの個々の課題と社会的課題との意識的な繋がりを支援することです。硬い言葉で言えば「自己変革と社会変革の統合」です。「ネットワーク」は元々社会との関わりを強く意識している団体ですが、今や任意団体から、NPO法人となり社会的責任が更に明確になったわけ

2. 会員に対する要望、期待

実践交流会を更に活性化しましょう。「事件は会議室ではなく、現場で起きている」ではないですが、真理は現場よりと考えます。医療や福祉は「制度」の下、儘にならないことが常ですが、これに物申し、変えていくのは現場での実践です。私は団塊の世代で、もうすぐリタイヤです。これからが本場に 医療・福祉と「ともに生きなければならぬ」現実が迫っています。そこでも、現場の皆さんと考えられる「患者・利用者」でありたいと思います。

その節は宜しくお願いします!

3. 問題提起

広報ツールのペーパーレス化を提案します。具体的に言えば「風の萌」を電子ベースで配信することです。そのことにより、①リンクを張り添付資料を見ることが可能となります。②バックナンバーもいつでも見ることもできます。③さらに、豊かとは言えない「ネットワーク」の経費削減になります。④そして、環境への配慮を多少はできることとなります。

もちろん、PC対応できない方もおいでになるので、その人のためには紙ベースでの対応もしなければなりません。少しでも合理化を進めることと、合理化と対峙するように見える「気持ち」や「心」とも向き合えるといいのです。ね。(私は個人的には紙ベースのほうが好きなのですが……)

NPO法人セカンドリーグ埼玉
：桑原由次

今回は、もう一人の事務局次長(前 西ブロック長)である石田美様に原稿をお願いしております。

介護保険法・高齢者住まい法改正大特集

□第5期介護報酬予測

〈訪問介護〉「24時間サービス」創設で基本報酬大幅減算
〈訪問看護〉「報酬増より開設要件緩和」求める声
〈通所介護〉基本単価減算の方向か
〈特定施設〉前回プラス改定の反動は?
〈小規模多機能型〉軽度の報酬増に期待 ほか

□24時間定期巡回・随時対応訪問サービスの状況
今年度モデル事業者の運営状況、既存居宅サービスとのすみ分け ほか

□複合型サービス(小規模多機能型+訪問看護)の進展
人員配置・報酬体系、24時間サービスとの連携 ほか

□「サービス付き高齢者向け住宅」登録状況調査
補助金申請状況、各自治体の登録状況、高齢者居住安定確保計画の作成状況 ほか

□老人福祉法改正による影響

入居一時金制度改定後、各老老事業者の取り組み、有料老人ホームとサビ住の一体化問題 ほか

高齢者の住まいと介護・医療を考える

高齢者住宅新聞

新規購読のご案内

●発行形態/定期購読・タブロイド版(20ページ)
月3回(5-15-25日)発行
●主要読者層
施設運営会社、介護サービス会社、医療法人、社会福祉法人、人材サービス、給食配食会社、不動産・建設会社、土地所有者、設備機器・建材、システム関連、金融関連、自治体ほか
年間購読料 18,000円(税込・送料別)

※高齢者住宅新聞購読者とご用の方へ
お名前、会社名、ご連絡先、ご住所をお知らせ下さい。

TEL 03-3543-6852

ホームページ <http://koureisha-jutaku.com> 新聞購読申込

メール info@koureisha-jutaku.com

FAX 03-3543-6853 下記に必要事項をご記入の上FAX下さい。

株式会社高齢者住宅新聞社 〒104-0061 東京都中央区銀座8-12-15
TEL:03-3543-6852 FAX:03-3543-6853 <http://www.koureisha-jutaku.com>

2012年新年特大号
平成24年1月5日号

主な特集内容

『在宅ケアを考える集い in 越後 2012』 〈全国の集いプレ大会〉

～在宅ケア〈医療・介護・住まい・看取り〉の飛躍的進展をめざして～

医療保険・介護保険の同時改正を終え、地域包括ケアシステムの整備を中心とした新たな仕組み作りの原点は、従来から求められている医療・福祉サービスの統合と住まいの提供にあります。

この中で、本会が目指し議論を重ねてきた在宅ケアを担う様々な職種の連携・協働をさらに進展するために、今回も多くの方から参加いただき、熱く有意義な議論ができますことを期待しています。

日時:2012年7月22日(日) 13:30-16:30

会場:新発田市生涯学習センター

新発田市中央町5-8-47

参加費:1,000円(当日徴収)

主催:新潟県在宅ケアを考える会

お問い合わせ、連絡は…
県立津川病院
吉嶺文俊 院長
TEL.0254-92-3311



総合司会 吉嶺文俊さん(県立津川病院院長)

1. 開会挨拶 13:30～13:35

矢澤良光さん(県立新発田病院院長)

2. 基調講演 13:35～14:35

「包括ケアシステムのあるむら・まち」

西嶋浩さん(厚生労働省医政局国立病院課在宅医療推進室)

3. シンポジウム 15:00～16:30

「県北で在宅医療を考えよう」

座長 阿部昌洋さん(阿賀町診療所長、県エルダー医)

シンポジスト

笹川康夫さん(笹川医院院長)

近 幸吉さん(県立坂町病院内科)

三村 健さん(ゆきよしクリニック理学療法士)

高橋是司さん(県介護支援専門員協議会長)

平野真弓さん(下越総合健康開発センター訪問看護師)

4. 特別発言

新潟県在宅ケアを考える会 会長 黒岩卓夫さん

5. 閉会挨拶 16:30

新潟県在宅ケアを考える会事務局長 上村伯人さん

愛媛プレ大会の報告書

「NPO 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク全国の集い in 高知2012 愛媛プレ大会」を5月20日(日)、松山市総合コミュニティセンターにて開催し、在宅ケアにかかわる県内外の医師、看護師など、医療・介護従事者、一般市民、約300名のご参加をいただきました。

本大会では、「在宅医療最前線」～在宅医療には、社会を変える力がある～とのテーマのもと、記念講演1「大災害時に求められる地域医療のあり方(気仙沼市立病院:横山成邦先生)」、記念講演2「高齢者が閉じこもらない都市環境整備をどう実現するか(世田谷記念病院:酒向正春先生)」の2つの記念講演、ならびに、教育セミナー「ヘルパーの医療行為セミナー」、「在宅医療の基礎知識セミナー」をおこない、今後迎える多死社会の中、治せなくても最後まで支える医療の重要性をうたえ、この「支える医療」を在宅医療の分野から発信し、社会を変えていきたいとの思いをお伝えし、盛会のうちに無事終了することが出来ました。大会を開催するにあたり多大なご尽力をいただいた関係者の皆様に、改めて感謝申し上げます。

事務局より

- 当会報 風の萌 発行スケジュールの変更のお詫びと今後の発行予定
今回は変則的な発行になってしまいました。次回は7月、さらに9月、11月発行といたします。
- ホームページ リニューアルのお知らせ
現在最後の確認を行っており、7月中旬には新フォームにて閲覧可能になります。

風の萌

2012年5月31日発行(第018号)

頒 価:1部50円 会員は無料

◆ 発行 特定非営利活動法人(NPO)

在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク

TEL:052-848-8800 FAX:052-848-8801

http://www.home-care.ne.jp/net/ E-mail:zenkokunet@home-care.ne.jp

〒458-0007 愛知県名古屋市中区栄山3-119 カーサフクシマC-32号

◆ 編集「風の萌」編集委員

∞∞∞編集後記∞∞∞

重ねて発行が遅れた点についてお詫び申し上げます。今後は内容の充実、方向性の明確化等に努めて編集を行いたいと思います。ご期待下さい。

高知大会の準備も着々と進んでおり、来年の新潟大会に向けての動きも始まりました。改めて「継続させることの重要性」を感じています。(T.Y.)